

など豪族の簒生する地域に黄巾が生起したが、それらが流亡農民による叛亂であるとは本書で證明されていないことからすると、第二次農地における大土地所有の展開、小農民搾取の問題と合わせても少し考えてみなければならぬのではないか。

以上の何に對する叛亂であつたのかという疑問は、更に考えていくと、それぞれの叛亂集團が叛亂對象に向けて何を、つまりどのような社會、人間關係の在り方、それは世界と言ひ換えてもよいだろうが、對置したかという問題に連なっていくように思われる。この問題について云々するのは本書の紹介としては見當はずれになるかもしれないが、赤眉、黄巾、五斗米各集團に共通していると思われるのは、本書の敘述からもうかがえるが、共同性、平等性への希求が強く存する點である。叛亂集團に見られる共同性、平等性への希求は、叛亂農民が叛亂對象に對置した世界の一端を垣間見させていて、黄巾叛亂については川勝義雄「漢末のレジスタンス運動」などいくつかの業績がすでにあるが、今後こうした觀點からの叛亂史研究も一層重視されねばならず、そのためには農民生活の實態や意識世界の検討がなされねばならないだろう。それと關連して、著者は赤眉、公孫述、黄巾それぞれの集團が自らの正統性や目標を承認させたり表現するために掲げた五行説にもとづく革命理論にふれていて興味深い。赤眉、黄巾の赤、黄が何を表現しているのか未だ定説の如きものはないが、著者の五行説による解釋は先學の見解を取り入れていて有力なものである。

要は、本書に明示された如き諸叛亂生起の自然的社會的諸條件と、それと關わりながら生き、歴史を展開させた人間達の營爲とによって織りなされた複雑な歴史的世界の様相を全一的に捉えなければならぬ

らないという、當然すぎるが困難な課題のより一層の追求が後に残されていると思われる。

秦末から後漢末に至る複雑な各集團の動向、展開を史料を博搜し、著者自身の理論によつて整理し意味づけた本書は、今後この分野の研究に缺くことのできない成果であらう。しかし、古代農民制の最後の段階たる隋唐期、そしてそれが地主佃戸制に轉換する唐末までに生起した諸叛亂の考察を、今や著者に期待できなくなったことを非常に残念に思う。末尾ながら、著者の御冥福を心から祈るとともに、かかる貴重な業績を一本に編纂して後學の研究の便に供された編者三氏の御苦勞に謝意を表して、この難駁なる紹介を終えたいと思う。

(東 晋次)

*The Cambridge History of China, Volume 10 :
Late Ch'ing (1800—1911), part 1.*

Edited by John K. Fairbank,
Cambridge University press,
1978. xvi+713pp.

『ケンブリッジ中國史』は、完結すれば、ハーバード大學のJ・K・フェアバンク教授とケンブリッジ大學のトウィチエット教授の英米共同編集による全十五冊で構成されることになる。さて、この第十巻が最初に刊行された事は、決して驚くべきことではない。何故なら、歐米の學界は從來十九世紀史—西洋がアジアを「開國」さ

せ、世界史に組み込んだ時代——に重きをおいてきており、本巻の編集者フェアバンク教授は十九世紀史研究の指導的權威であるのだから。

この大冊の多くの部分は今なお中國の對外關係を扱っているが、近年、清末の歴史研究はいくつかの流れに分歧しつつある。例えば、列強の侵略の影響をまだ受けていないより廣範圍の歴史的潮流を理解する爲の、そして西洋に直面したかの個性的な社會の性質に對するインデックスとしての、地方レベル及び列強到來以前の中國の政治的社會的機構の研究がそれである。これらの新しい傾向が全く見られないわけではないが、本巻は、現在までの歐米の中國十九世紀史研究の、長所、弱點、そして偏向を明らかに見せてくれる。本巻の内容は以下の通りである。

總編集者の序言

地圖リスト

第十卷への序言

一 序章 舊秩序

ジョン・K・フェアバンク（ハーバード大學）

舊社會／政府／對外關係

二 一八〇〇年頃の清朝内陸アジア

ジョセフ・フレッチャー（ハーバード大學）

内陸アジアにおける清帝國／滿州／モンゴリア／新疆／チベット

三 王朝の衰退と反亂の起源

スーザン・マン・ジョーンズ（ハーバード大學）

四

フィリップ・A・クーン（シカゴ大學）
人口増加とその結果／學校制度、師傅・門生關係と社會的流動性／嘉慶改革／危機の前兆——漕運制度／貨幣・徵稅制度の混亂／反亂の起源／中央の弱體化と新學派／經世學派・今文學派の典型——魏源／新たな問題の焦點——邊境防衛
廣東貿易とアヘン戦争

フレデリック・ウエイクマン

（カルフォルニア大學バークレイ分校）

貿易の特色／腐敗と公用銀／英中貿易の獨占者／獨占の終焉／アヘン貿易／ネーピア事件／廣東包圍／戦争への趨勢／戦争の第一局面／廣東の解放／戦争の最終局面／敗北——南京條約

五

條約體制の創出

ジョン・K・フェアバンク

條約體制の概観／一八四二～四四年に於ける條約の締結／條約港の開港／條約港の外人社會／英國對廣東／中國沿海の混亂／上海の興起／廣東における第二次アヘン戦争勃發／一八五八年條約／帝國の政策對貿易の擴張／一八六〇年條約／條約體制の現實

六

太平天国

フィリップ・A・クーン

起源と發展／舊秩序の守護者／内訌と衰退／捻軍の性格——一つの比較／太平天国の實像

七

清露關係——一八〇〇～六二年——

ジョセフ・フレッチャー

貿易擴張努力の失敗／中央アジア貿易とクルチャ條約（一八五二）／東北滿洲の喪失

八 全盛期におけるモンゴリア、新疆、チベットの清朝體制

ジョセフ・フレッチャー

衰退するモンゴル遊牧社會／新疆：マフドームザーダとコーカンド／チベットの鎖國とインドからの壓力

九 清朝の中興

劉廣京（カリフォルニア大學）

清朝勝利の要因／揚子江下流地域の戦後問題／捻軍とその影響／中興の實像

十 自強運動：西洋技術の追求

郭廷以（元中央研究院近代史研究所所長）

劉廣京

理論：初強の自強提案／政治的・財政的構造／初期の局面：長期計畫

十一 キリスト教宣教團と一九〇〇年への影響

ポール・A・コーエン（ウェズリー大學）

宣教師の事業／宣教師の事業と舊秩序／宣教師の事業と新秩序

文獻解題

文獻目錄（歐文、中文・日文）

清朝王族家系圖

索引

西洋の學界は、最近までのウェヌスタン・インバクトの強調の學風と關連して、中國語史料利用の皮相さと過去九十年にわたる日本の

中國學の豊富な傳統の無視を批判されてきた。また西洋の學界は、特に英・米ではほとんど内陸アジア史學を生みだせなかった。本巻を現在までの西洋の中國十九世紀史研究の最高水準のものと取りあげる時、これらの論文はこの批判にどう答えるであろうか。

本巻の十一論文のうち、フレッチャー氏の三論文は、清朝の對内陸アジア關係を扱っている。氏が利用された八、九種の言語の非常に多くの史料の大部分は、かつて英語で論議されたことはないし、また斷片史料としても利用されたことはない。にもかかわらず、十九世紀に至るまでは、滿清體制の焦點は内陸アジアにあった。第二章で、フレッチャー氏は、漢民族の文化・人口の流入に直面した時の清朝内陸アジアの様々な民族について述べている。皮肉にも、一方で清朝が漢民族の非漢民族地域への擴張を防ごうとしながら、現實には滿洲人は中國化しつつあった。フレッチャー氏は、非漢民族間及び彼らと漢民族間の文化的・宗教的差異に十分な注意を拂っているが、このことは内陸アジアにおける清朝體制の理解には不可欠なことであろう。

内陸アジアでは、中國本土と同じように、清朝の權威は一つの上敷であり、平時には皇帝の臣民からはるか遠い存在であった。彼らに壓制が加えられるのは反亂時だけである。清朝という上部構造は、ほとんど民衆の日常生活に干渉しなかったが、その存在によって、彼らの權力位置の固有のヒエラルヒーを保ち、地方の制度を維持、更には強化さえしたのである。（一〇五頁）

フレッチャー氏は結論している。清朝は、基本的には、内陸アジアの諸民族が平和的である限り、北京に送られる歳入が少量であつたにもかかわらず、満足していた、と。

中國化の過程は、フレッチャー氏が第八章で十九世紀内陸アジア史を敘述する際の手段である。ここで彼は、十九世紀は衰退の時代である、という一般に受け入れられている觀念を否定する。

もし帝國が……衰勢にあつたとしても、中國、漢民族、その文化と勢力は空前の擴張の時期を開始していた。中國はすでにその滿洲の征服者を同化していた。諸反亂から生き残る爲に、王朝は八旗兵の軍事力獨占を廢止し、軍事指揮權を漢民族の手にゆだねざるを得なかつた。(三五頁)

けれども、漢民族文化が流入する際の内陸アジア民族文化の衰退は、中國化が必然的にもたらしたことである。もちろん、文化の流入は反動を伴なわざるをえなかつた。

モンゴリアは清朝の支配下で衰退したが、靜穩を保つた。新疆の支配はよりうまくいっていたが、それでもなお反亂を起こした。チベットはその固有の生活の中で、大體清朝の權威の影響を受けないままであつた。これらの違いは、各民族自身の性格と滿清のそれらを併呑した元々の目的の違いに根ざしている。

その清露關係の章で、フレッチャー氏は清朝—ロシア間の長きに亙る交渉と、外交及び國境沿いの貿易の重要性について述べる。この章の多くの部分は、頻繁な密貿易が清朝をその合法化に迫り込む過程を取り扱っているが清朝の權威が否定されないためには、そうするしかなかつたのである。フレッチャー氏は詳細に、利權を求めて中國にやつてきたロシアの使節について述べている。彼は、清露

外交は清朝の他の西歐列強との接觸に先んじており、従つてそれは後に中國がイギリスやフランス等と折衝した際の、多くの外交儀禮を確立した、と論じる。

上述の研究に豊富な語學の力量が必要であることや、英語文獻の研究蓄積が不足していることを考えれば、本卷のフレッチャー氏の論考はすばらしく價值あるものであることがわかる。彼がこのような難解な史料を讀める文章にしたことも大變な助けである。

恐らく、彼の業績は、清朝の宮廷と政府に中心的な關心を持つ從來の西歐の學界の偏向を是正し、我々の視野を内陸アジア史にまで開くの役に立つであらう。というのは、我々歐米の中國史家は内陸アジアの文化と言語になじみがない爲、フレッチャー氏の論文に使われている單語や名稱をすぐ混同してしまふ程だから。歐米の中國史學も初歩的であるが、それは内陸アジア史においてより一層弱點である。フレッチャー氏は我々に良き出發點を與えてくれた。

本卷の珠玉の論考とでも呼ぶべきものは、ジョーンズ氏とクーン氏共同執筆の第三章である。兩氏は、十九世紀史を説明するための傳統的な王朝衰退モデルの有効性をきびしく問うことから始める。

兩氏は、嘉慶朝初期に和珅時代の殘滓たる弊害を徹底的に除去できなかったことが、清朝を窮極的なディレンマに陥らせたものと見ている。この問題に同時期の並行する危機が追加される。「目には見えない、清朝官僚機構の處理能力を越える複雑な社會問題。それらの中心に人口に對する資源の比率の問題があつた。」(一〇八頁)十八世紀の爆發的な人口増加によつて、そのようなドラスティックな變化に備えない經濟的社會的分野にその對應を迫られた。ジョーンズ氏とクーン氏は、漕運制度、鹽政、黃河の管理行政の崩壞を詳

細に分析している。

十八世紀末から十九世紀初頭にかけての諸反亂はこのように清代の猛烈な人口壓力とその結果としての内地移住の文脈の中に位置づけられる。ジョーンズ、クーンの兩氏は白蓮教反亂とそれが中央政府の統治能力に與えた影響に大いに注目している。白蓮教反亂は八旗兵の無能さを暴露した。このため鄉村社會は自ら武裝自衛し、傭兵をやとわねばならなかった。兩氏は、「清朝軍事力の決定的な衰退を證明したのは、アヘン戦争ではなく、白蓮教反亂であった。」（一四三—一四四頁）と結論している。數十年前にこの結論に到達していた内藤湖南に學んだ日本の學者にとつて、この結論はあまりにもありふれたものに見えるであらう。しかし、長い間アヘン戦争が中心的な重要性を與えられてきた西洋の歴史學界では（マルクス主義史學も含めて）、この結論は眞に劃期的なのである。

清朝固有の諸問題に氣附いていた同時代の中國人も存在した。ジョーンズ・クーンの兩氏は魏源の經世書を考察している。これらは清朝學術がおおむねより實學的方向へむかつていたことを示すものでもある。魏源は、清朝が（宦官や重税等の）社會的國家的問題の對處では明朝より優越していることを認識していた。が、彼は、清朝が直面する諸問題が前例を見ない程のものであり、それらを解決する爲の特殊な人材の登用が必要だ、と考えていた。一般に、西洋の歴史學者達は十九世紀初頭の歴史をアヘン戦争と太平天国の反亂というブリズムを通して下向的に眺める傾向があるが、ジョーンズ・クーンの兩氏は、十九世紀初期をより廣く（そして上向的に）十八世紀末からの歴史の通觀の中で見ることによって、我々の見方を決定的に變えてくれる。

第四章のウェイクマン教授の論考は、公行制度下の廣東貿易の歴史をたねんに記述している。アヘン戦争前の貿易制度と、世界規模のアヘン流通の發展について、英語で書かれた最上のものである。著者は、アヘン戦争へと突き進む林則徐の行動を理解するために、林自身の政治的行動と思想の變遷を注意深く位置づける。かくして、しばしば賞賛されているような近代的ナショナルリズムの先驅的としてのみならず、より現實的な林の姿が提示される。本章のもう一つの成果は、實際の戦争と、その結果としての南京條約を見事にえがき出している所にある。

フェアバンク氏の手になる條約體制の形成に關する次章は、構成上ウェイクマン氏の章の續きである。フェアバンク氏は、中國人に押しつけられたアヘン貿易を、「近代における、最も長い間にわたる、そして組織的な國際犯罪であり、初期の英國の中國侵略の活力源となった。」（二二三頁）と言う。また、この分野での一生涯にわたる研究に基づき、著者は條約體制についての卓越した概要を述べ、打ちつづく危機と一八六〇年の和解による解決を描いている。上海が急速に十九世紀で最も重要な商業中心地となる歴史を描いた部分は特に興味深い。また、フェアバンク氏の一章は、非常に読みやすく、本書中で最も良く書けたものである。ただ、フェアバンク氏とウェイクマン氏の論考の一つの問題點は、この問題についての日本人學者の研究に注意を拂っていないことである。これは歐米の中國史研究の中心的な課題の一つであり、最近になって改善されはじめたにすぎない。それなりにこの二つの論文は、歐米でのこの分野の研究状況を反映している。

歐米で最もよく研究されてきた問題の一つは十九世紀の反亂である。これらの研究の缺點は、イデオロギーの考察が過剰であつたことであるが、近年、十九世紀の諸反亂を、特殊な歴史的状況への暴力的反應として分析すると同時に、他の國の反亂と比較して研究する努力が眞剣に行なわれてきた。クーン教授は、この分野の第一人者であり、彼の太平天国に關する一章は、これらの成果を集大成した、すばらしいものであり、英語で、恐らくは他の言語を含めて、書かれた最良のものである。太平天国運動の起源を述べてから、著者は桐城派と經世派の思想の中に、曾國藩の反應の緒端があることを注意深く示す。ここから、曾國藩の「團練」、つまり地方でつくられた民兵組織——「清末の反亂とその敵」（ハーバード、一九七〇年）の中で詳細に論じられた問題である——は生まれた。また、太平天国の純粹主義と、密教的・「キリスト教」的イデオロギーが、この運動を不利に導くこととなつた、とクーン氏は結論している。それは他の古くからの反亂集團と合作するのを妨げ、更に、多くの傳統的な社會的價值と制度とを拒絶するに至らせた。かくて、占領地域での農村支配は困難の度を加えたのである。クーン氏は太平天国の大きな歴史的意義を、その弱點の中から引き出す。

當時のいかなる反亂にもまして、時代の危機に正面から取りくみ、解決の具體的方策を提出した。その新たな財産所有制度、新たな地方支配機構、新たな個人と國家の關係のビジョンは、清末における特殊な課題への確かな對應であつた。十九世紀の社會の歴史を、王朝末期＝衰退という周知のパターンに還元することは、太平天国の現象とその背景によって、一層むづかしくなる。(三一七頁)

九章で劉教授は、太平天国の殲滅後、同治帝治下の清朝が權力を回復しようとした過程を描いている。彼の分析は、同時代史料（上奏文等）に據っており、よく當時の中國の大官僚のいぶきを傳えている。劉氏が示すところの提議された改革の像は、中國の諸問題の本質に關する改革者の認識に沿つたものである。中興の時期のさ中に起つた捻軍を分析する際に、劉氏は、捻軍が支配地域を固めるのに、極めてオーソドックスな方法を用いたことを論證している。十數年前、故メアリー・ライト教授は同治中興を「中國保守主義の最後の興起」と名づけた。劉氏は、概ねこの觀點に従っているが、最近の研究が一八六〇年代の清朝の勝利を、官僚機構よりも郷紳の利害關係が優位におかれていたことに見ていることには承認を與えている。中國の都市地區が、一時的にそこから驅逐された地方エリートによって反亂者の手から奪回される具體的な過程を詳述する際には、劉氏の研究は非常な強みを發揮する。劉氏と郭廷氏氏の共著になる九章は、歐米でもよく知られた材料を用いている。西洋人は、自強運動とその指導者達に關しては多くの研究を行なってきたが、それは、おそらくは自強運動に與えた西洋人の援助と技術の重要性の故にであらう。劉、郭の兩氏は、しっかりと中國語史料の上に立つて研究しているが、結論には何ら目新しいものはない。九、十章とも、この問題に關する今日までの我々の知識の見事な要約であらう。

中國に於けるキリスト教宣教に關する最終章を本巻に含めることは、このような問題の重要性についての疑問を生む。その中で果した西洋人の役割が大きいからといって、それは重要ではあるが別の

問題であるように思われる。何人もこの問題が検討に値するものであることは否定しないであろうが、『ケンブリッジ中國史』中にまるまる一章をさくのはゆきすぎであると思われるかもしれない。しかし、コーエン氏は、この外來の宗教に對する中國人の様々な反應の性格を考察することによって、また、これらの諸反應を中國の社會構造の中から生じてきたと見ることによって、この問題（著者は幅廣くこの問題について研究してきた）に新生面を開いている。従つて、この研究は、宣教師の中國に與えた衝擊（宗教的・教育的な）と、中國人の側の排外的な反應との兩方を敘述的に分析したものととなっている。

この巻には、全十一章の各々に對する文獻解題が附いている。これは極めて有用であり、將來の研究方向のみならず、現在吟味されつつある、歴史研究上の係争點の多くを指摘している。フレッチャー氏の文獻解題は、その主題の複雑さによるところが大きいだろうが、最も徹底のかつ魅力的——語學的觀點からして——である。また、本文中に引用された文獻については、より包括的な文獻目錄が附されている。

外國人讀者は『ケンブリッジ中國史』のこの巻を読んで、中國の外國との關係が強調されていることに驚かれるだろう。滿洲政府と西洋の對決が中國十九世紀史では中心的なテーマであることを否定する人はいまい。しかし、ジョーンズ、クーン、そしてフレッチャーの各氏の論文のようなものを得て始めて、この對決は、より大きな歴史的な觀點から見ることができるのである。例えば、和珅時代後の社會・政治・經濟的環境、及び白蓮教反亂の鎮壓に示された八

旗兵の軍事的無能力が述べられているので、アヘン戰爭の危機や太平天國を、清朝が處理できなかったことが更に一層理解しやすくなるだろう。特にフレッチャー氏の諸章は、十九世紀初頭において、清朝政府が何を最優先のものと考えていたのか、という問題に對する我々の見解を方向轉換させてくれる。論文のいくつかは、日本人の研究を參照してはいない。もともと、西洋の研究者の興味の對象が變わるにつれ、この狀況は變えられつつある。數世代後になつて、新『ケンブリッジ中國史』が書かれる時、この新しい潮流も組み込まれるであろう。新『ケンブリッジ中國史』も、その時になれば更に新しい研究の潮流をとらえきれないのはまちがいないであろうが。

(ジヨシユア・フォーゲル)

中國革命の史的展開

寺 廣 映 雄 著

昭和五十四年二月 東京

汲古書院 A5判 四三〇頁

辛亥革命をはじめとして中國近現代史の研究は近年著しく進展してきたが、本書は、その推進者の一人である著者が、過去二十餘年間に發表した論文の中から、主要な十五篇をえらび一書にまとめた研究論文集である。その内容がアヘン戰爭から第二次國共合作の時期までの革命史にわたっていることから、『中國革命の史的展開』と